3. 東洋文化学系

東洋文化学系は，「東洋」と呼ばれる地域の文化の諸相を，言語と文学と思想の面から探求し，学問の対象としようとする系である。以下の専修から構成されている。

国語学国文学　　専修
中国語学中国文学　　専修
中国哲学史　　専修
インド古典学　　専修
仏教学　　専修

ここでいう「東洋」とは，日本，中国，インドをそれぞれの中心とした三つの文化圏の総体を指すものである。それぞれの文化圏には，悠久の時の流れの中で培われてきた大きな伝統が保持されている。その流れは大河の如くであるが，しかしその流れはまた，その時々の様々な新奇なまた異質な文化的要素との接触･衝突のなかで激流となり，新たな流れを生み出し，さらにまた合流して形成されてきたものでもある。したがって，たとえ近代･現代の文化的事象を対象に学問するにしても，目の前の事実だけではなく，その背後に伏流する諸文化層，大小さまざまな伝統の流れを視野に入れなければならない。事態は，古代を扱う者にとっても同様である。たった一巻のテキストといえども，単一の文化伝統から生み出されたものと思い込んではならない。その背後にある文化の諸相に常にまなざしを向ける必要がある。

この三つの文化圏は，古くから文化的な接触を続けてきた。たとえば東アジアの芸術文化･言語文化の形成と展開を考えるとき，紀元 1 世紀頃からシルクロードを経てもたらされたインド･中央アジアの仏教の文物，とりわけ大量の翻訳仏教経典の影響を無視することはできないであろう。また，近くは 20 世紀日本を文化的中継点として，西欧文化が東アジアに与えた影響の大きさを知るならば，現代におけるこの地域の文化接触の実相について考えることになるだろう。様々の視点から，なお多くの問題を見出すことができるに違いない。

この系で学ばれる事柄の多くは，現代の世界とは時空を異にする地平で生み出されたものである。そのような事柄を理解するためには周到な準備が要求される。今日に残された文献や口頭伝承を通じて，過去の声を聞き空間を隔てた思いを読み取るためには，諸言語の確実な習得と，何よりも言葉を大切に思う繊細で厳密な読解力が不可欠である。したがって，いずれの専修を選ぶにしても，第一に必要なのは語学力である。語学力と言っても単なるスキルではない，古代語であれ現代語であれ，そこにとどめられた声と思いを大切に感じ取り読み取ろうとする愛情に支えられた力である。文献学(フィロロギー)とは「言葉を愛する学」に他ならないのだから。

■ 国語学国文学専修

教　授　　大　槻　　信　　国語学，特に中古語･古代語
教　授　　金　光　桂　子　　国文学，特に中古文学･中世文学
准教授　　河　村　瑛　子　　国文学，特に近世文学
准教授　　田　中　草　大　　国語学，特に文語の歴史

〔著書･論文〕 大槻『平安時代辞書論考　―辞書と材料―』吉川弘文館，「古代日本語のうつりかわり　―読むことと書くこと―」(『日本語の起源と古代日本語』臨川書店).
金光『中世の王朝物語　享受と創造』臨川書店，『時雨物語絵巻の研究』臨川書店(共著).
河村『古俳諧研究』和泉書院，「『笈の小文』旅中書簡小考」(『雅俗』18).
田中『平安時代における変体漢文の研究』勉誠出版，「『尾張国解文』現存テクストの成立についての試論」(『国語国文』87-12).

授業は，上記の専任教員のほかに，人間･環境学研究科の国語学国文学関係の教員と，非常勤講師とによって行われる。非常勤講師は，本学の教員の専攻しない分野を補う。国語学と国文学と，一応二つの専門に分かれているが，伝統的に，国語学研究と国文学研究を相互に密接に結びつけることによって，それぞれ豊かな実績を挙げてきた。したがって，学生も，関心の対象をあまり早くから限定せず，国語学･国文学の双方に対して幅広い関心を持つことが望ましい。

本専修では，伝統的に古典文学の研究が中心になっているが，それは京都という地理的な要因と，文学研究科図書館や附属図書館に収蔵されている，大量の貴重な古文献の存在が，古典研究に有利であるからである。図書館の原典に触れながら，研究を進めてゆけるという恵まれた環境の中で，さまざまな視点から，古典文学，古典文化の研究を進めてゆくことによって，自ずから質の高い研究が生まれてくる。もちろん，近代文学の研究も盛んであり，授業も行われているが，収蔵図書については，古典文学ほどには豊富ではない。また，現代文学については，授業は行われていないし，資料も少ないが，現代という同じ時間を生きているので，資料は各自で蒐集することもでき，創意工夫が可能である。

国語学国文学研究室では，研究活動の一環として，月刊誌『国語国文』を編集･刊行している。国語学国文学関係の専門誌として東京大学の『国語と国文学』と並んで歴史が古く，国語学国文学研究の一拠点としての役割を長く荷い続けている。また，若い研究者が中心となり，『京都大学　国文学論叢』も発行している。

『国語国文』『京都大学　国文学論叢』以外にも，研究室では貴重な資料の学界への提供を旨として編集･出版活動を行っており，最近の例では，京都大学国語国文資料叢書五十余巻の他，『改修捷解新語』『京都大学蔵大惣本稀書集成』『ヴァチカン図書館蔵　葡日辞書』を刊行し，『京都大学蔵　むろまちものがたり』全十二巻ならびに『貴重連歌資料集』全六巻，『和漢聯句作品集成』(室町前期･室町後期)，『潁原文庫選集』全十巻を刊行した。

本専修の在学生と卒業生は，京都大学国文学会という会に加入する。同窓会組織であるが，その名の通り「学会」の性格が強く，毎年 11 月～12 月頃に開かれる例会では，大学院生の研究発表や学術講演が行われる。研究とはどんなものかということに触れるためにも，聴講することが望ましい。

■ 中国語学中国文学専修

教　授　　木　津　祐　子　　中国語学史
教　授　　緑　川　英　樹　　中国古典文学
准教授　　成　田　健太郎　　中国古典学，中国書論史

〔著書･論文〕 木津『京都大学文学研究科蔵琉球写本『人中画』四巻付『白姓』』（編著，臨川書店，2013）．同「京都大学蔵王筠校祁寯藻刻『説文解字繫伝』四十巻について」（2020）(論文)，同「「官話」再読」（2022）（論文）

緑川『文選 詩篇』(共著，岩波文庫，2018～19),同『韓愈詩訳注』(共著，研文出版，2015～)．同「万里集九《帳中香》的詩学文献価値」(2021)(論文)

成田『中国中古の書学理論』(京都大学学術出版会，2016)．同「王羲之と衛夫人の師承関係について」(2020)(論文)，同「唐宋の蘭亭伝説について」(2021)(論文)

本専修が対象とするのは，文字が出現してからの3000年以上たえまなくつづき，さらにヨーロッパのロマンス諸語ほどの差異のある中国語諸方言のひろがっている時空の中で，漢字を用いて伝えられてきた言語･文学の全体である。
ただし，書きことばの上では，古くから共通の規範をもとうとする求心的傾向が強く，標準的古典語と現代共通語(普通話)との学習を出発点に，ほとんどの文献は読めるようになる。古典と近代とを乖離させずに，一つの大きな流れを見通すにも，これら2種のことばの基礎力は欠くことができない。その際，いかなる時代の作品を扱うにも，正確な語感の把握のためには，会話･作文を含めた現代語の力が前提となることは強調しておくべきであろう。また，口承系の資料を研究するには，対象地域により方言の知識が必要となることがある。

はじめにのべた対象領域の広さゆえに，専任教員のみでは充分な授業をおこなうことができない分野が数多く存在する。そうした面については，人文科学研究所，人間･環境学研究科および他大学から出講いただいている講師陣の強力な応援がある(詳細は今年度の学生便覧参照)。また院生･学生独自の読書会･研究会も，それぞれの関心に応じ開かれている。意欲的な学生には，方法論的問題を考えるためにも，中国以外の言語文化圏への関心をあわせもちつづけることをすすめる。

在学者ならびに卒業生を中心に中国文学会が組織されており，年1度の例会では同会会員の研究者による発表がおこなわれる。年2回発行される研究雑誌『中国文学報』は，学界において高い権威が認められており，現在までに95冊を数える。中国その他から来学された学者の講演会なども毎年開かれている。

木津教授は，文明の言語としての中国語という観点から，非中国語圏との接触が活溌であった周縁地域の言語に着目し，その接触によって形成された境界的中国語の実態を明らかにすることを目指している。

緑川教授は，中国古典詩と文学理論，とりわけ「唐宋変革期」と称される中唐から北宋に至る時期を中心として，「宋調」(宋詩的なるもの)の形成と受容，詩学観念の演変といった問題について考察している。

成田准教授は，前近代中国の知識人階層における「書くこと」について，特に書や散文において「作者の個性」のようなものがどのように自覚され構築されたか，作品と言説の両面から考察している。

■ 中国哲学史専修

教　授　　宇佐美　文　理　　中国近世思想史

准教授　　池　田　恭　哉　　中国中世思想史

〔著書･論文〕 宇佐美『『歴代名画記』〈気〉の芸術論』岩波書店　2010,『中国絵画入門』(岩波新書) 岩波書店　2014,『中国藝術理論史研究』創文社　2015,「杜甫詩における視覺の問題」(『日本中國學會報』第六十九集) 2017。池田『南北朝時代の士大夫と社会』研文出版　2018,『中国史書入門 現代語訳 北斉書』(共著) 勉誠出版 2021,「熊安生伝」(『京都大学文学部研究紀要』62 号)　2023。

中国哲学史は，中国人の思索の歩みを研究する学問である。よく中国哲学史と呼ぶのがよいか，それとも中国思想史と称するほうがよいかが議論されることからもわかるように，中国哲学は西洋哲学とは内容をかなり異にする。形而上学や認識論が中心課題となることはそれほど多くなく，論理学もまた発達しなかった。しかしそれは，中国人が世界や人生について充分な思索を行わなかったということではない。彼らもそれらについて，究めつくせないほどの思想的業績を遺しているのである。ただそれが，西洋とは全く思考様式や発想を異にする中国独自のものであったということである。その点をまず心に留めておいてもらいたい。

平凡ながら，中国人が何をどのように考えたかを知ること，中国哲学史研究はこの一事につきる。したがって，一切の先入観を捨て，中国人の立場に立ってその思考を跡づけることがまず何よりも必要である。西洋哲学の概念や類型にあてはめて事足れりとすることは，厳に戒めなければならない。もっともそれは，中国哲学の研究に西洋哲学の知識が必要ないことを意味するのではむろんない。中国の哲学を正確に分析するためには，西洋哲学の知識はむしろ不可欠である。ただそれを機械的にあてはめてはならないと言うのである。諸君は積極的に西洋哲学を，さらには宗教学･倫理学･美学等についても勉強してほしい。またインド哲学や仏教学の素養が必要なことは言うまでもない。

中国人の立場に立ってものを考えるためには，古典文献，すなわちいわゆる漢文が正確に読めることが何よりも必要である。学生にとって，漢文読解力修得が第一の肝要事である。したがって本専修では，演習，講読に最も力を注いでいる。その方法は，清朝考証学を踏まえた文献実証学であり，訓詁と典故とを重視する。一字一句をゆるがせにしない詳細な読みと出典調べが要求される。一見哲学とは無関係の，無味乾燥な作業と思うかもしれないが，どうか我慢してほしい。それが哲学研究の基礎となるのだから。教材の中心は経学関係の書である。経学は中国哲学の根幹であり，経学を全く抜きにした思想家は存在しない。道･仏教家の場合でも，経学がその素養にある。故に中国哲学を研究する者は，その専門分野のいかんにかかわらず，まず経学を学んでおかなくてはならない。経学演習は必修課目と思ってもらってよい。

しかし，経学が中国哲学の全てではない。仏教や道教はむろんのこと，最古の甲骨文から現代の新儒家や社会主義思想まで，中国哲学の稔りは豊かである。若いうちは自らを限定せず，できるだけ広く関心をもっていてほしい。従来の経学や儒教のみの哲学史はもはや過去の話となった。仏教をはじめとして多彩な分野に関わる講義が設けられているので、それらの積極的な聴講を期待する。

あと一つ注文を言えば，できるだけ早いうちに中国語を習得しておくこと。学術の国際交流の上からも欠かせない。

日本人にとって，中国は文化の母とも言える。色々書いたが，中国語や漢文をこれまでとくに学習していなくとも構わない。意欲ある諸君の専修を待望する。なお卒業生と院生を中心として「京都大学中国哲学史研究会」が組織され，その機関誌として「中国思想史研究」(年刊)を刊行している。

■ インド古典学専修

教　授　　横　地　優　子　　古典サンスクリット文学，ヒンドゥー教

教　授　　ソームデーヴ･ヴァースデーヴァ　　インド思想，シヴァ教，サンスクリット文学･文学理論

特定外国語担当講師　潘　涛（パン　タオ）インド・イラン文献学, トカラ仏教, 印欧語言語学

〔著書･論文〕　横地『ヒンドゥー教の聖典二篇：ギータ･ゴーヴィンダ，デーヴィー･マーハートミャ』(小倉泰と共著)，平凡社（東洋文庫)，2000 年．同 *The Skandapurāṇa Volume III, Adhyāyas* 34.1-61, 53-69.　The Vindhyavāsinī Cycle. Leiden & Groningen, 2013.

ヴァースデーヴァ　*The Recognition of Śakuntalā by Kālidāsa.*　Clay Sanskrit Library.　New York 2006.　同 *The Yoga of the Mālinīvijayottara.* Collection Indologie 97.　Pondichéry 2004.

藩　*Untersuchengen zu Lexicon and Metrik des Tocharischen*. PhD dissertation, Ludwig-Maximilians-Universität, München, 2019.

本専修では，古典サンスクリット語に代表されるインド･アーリア系諸言語と，それらの言語で編纂された古代インド文献の研究を行っている。インド･ヨーロッパ諸語の中でも古いかたちをとどめるサンスクリットの研究は，古代インド文献のみならず，インド･ヨーロッパ諸語の歴史的研究にとっても不可欠なものである。学生諸君には学部生の間に，人類の貴重な知的遺産であるサンスクリットを学習し，そこに内包される言語的叡知に触れてみることをお勧めしたい。ただし，その学習はある程度根気を要することを付け加えておかなければならない。特に本専修を志す人は，三回生までにサンスクリット文法のクラスを受講しておいてほしい。サンスクリット文献の研究に取り組むためには，これは必須である。また，サンスクリットの研究には 200 年の歴史と，その間に蓄積された膨大な研究業績がある。それらの業績の大半は，ドイツ語，フランス語，英語で書かれているので，卒業論文を仕上げるには，英語以外にドイツ語やフランス語の資料もある程度扱えることが望ましい。

本専修では，古代インドの哲学，宗教，言語，文学，文化史に関わる諸文献の研究をすることができる。専修主任の横地は，ヒンドゥー教神話伝説，プラーナ文献，古典サンスクリット文学の研究に従事するとともに，文化史的視点から女神信仰の研究も行っている。教授のヴァースデーヴァは，インド哲学全般を扱うが，特にシヴァ教文献及び古典文学とその理論(詩論・修辞学等) を専門としている。近年は新論理学を適用した文学理論の研究に力をいれている。特定外国語担当講師の潘はトカラ語文献を専門とするが，南アジアから中央アジアにおいて使われたインド・イラン語文献，中央アジア出土の写本全般にくわしい。また，毎年学内外から数名の講師を招き，ヴェーダ文献，中期インド語，近現代インド諸語，土着文法学，哲学諸派，ジャイナ教，インド科学史等の授業を開講している。

本専修は国際的にインド古典学の主要な教育・研究拠点の一つとして認められており，海外の研究者との研究交流，共同研究もさかんに行われている。そのような現状をふまえて，本専修の授業のほぼ半分は英語または日英併用で行われている。学生は日常的に英語での議論や質疑に参加することで，英語のコミュニケーション能力を高めることができる。

ジュニア・オープンキャンパスのポスターセッション用ポスター(学生製作)

■ 仏教学専修

教　授　　宮　崎　　泉　　後期インド仏教，チベット仏教

〔著書・論文〕『中観優波提舎開宝篋』テキスト・訳注『京都大学文学部研究紀要』46，2007．Atiśa (Dīpamkaraśrījñāna)—His Philosophy, Practice and its Sources, The Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, 65, 2007.『禅定灯明論』に説かれる漸門派説について，『仏教史学研究』51-1，2008．インド大乗仏教における解脱の思想と慈悲，『日本の哲学』12，2011．Atiśa の如来蔵思想—その典拠と大中—,『印度学佛教学研究』65-2，2017 他.

本専修は，伝統的に，インド及びチベットの仏教思想史の研究と教育を中心としているが，中国仏教については人文科学研究所その他学内及び学外の研究者の出講によってこれを補っている。

本専修を志望するものは，2 回生の段階において少なくとも初級サンスクリット語並びにチベット語を学習し，また学部在学中にパーリ語をも習得することが期待される。漢文仏教文献を扱い得る漢文の素養も必要であることはいうまでもない。仏教学は，国際性の高い学問であるので，大学院に進学しようとする学生は英･独･仏語のうち少なくとも一つについては作文･会話を含めて十分に習熟することが望まれる。

宮崎教授は後期インド仏教を専門とし，そのチベットへの伝播についても関心を持っている。特に，インド禅定思想のチベットへの受用の問題，並びに大乗仏教の展開について研究中である。

本専修のスタッフによる講義，特殊講義，演習のほかに，サンスクリット語，チベット語(いずれも学部共通語学)の講義が学生のために用意され，またインド古典学専修の授業のうちのいくつかは本専修と共通となっている。

令和 5 年度には学外から来講している室寺義仁講師(滋賀医科大学非常勤講師)が瑜伽行派を，佐藤直美講師(宗教情報センター研究員)が大乗経典を，志賀浄邦講師(京都産業大学教授)がインド仏教論理学を，加納和雄講師(駒澤大学准教授)がサンスクリット写本読解を，高橋慶治講師(愛知県立大学教授)がチベット語中級を担当し，船山徹講師(人文科学研究所教授)が中国仏教を，熊谷誠慈講師(人と社会の未来研究院准教授)がアビダルマを，デロシュ　マルク　ヘンリ講師（総合生存学館准教授)がチベット仏教瞑想論を，倉本尚徳講師（人文科学研究所准教授）が中国仏教を講じている。